NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

総　会　報　告

記念館で 5 月 19 日（日）総会が開かれました。

最初に松村高夫理事長から挨拶があり、その後、議長、記録、議事録録署名人を選出し議事に入りました。最初に芹沢事務局長からこの 1 年の経過報告(別紙)がありました。昨年は会報 23 号でお知らせの通り 8 月に兒嶋俊郎理事（長岡大学教授）が急逝され理事会は大きな悲しみを体験しました。また一昨年亡くなった「中帰連」事務局長だった高橋哲郎さんを「偲ぶ会」もありました。

昨年度も学者や院生の来館もありましたが、笠原十九司さんや荻野富士夫さんなど学者や市民で「供述書を読む会」が発足し、また新井利男さん（故人）から寄贈された資料整理のボランティアの皆さんも月 1 回程度の来館で整理を進めて戴いております。

昨年も例年通り「７・７集会」を埼玉会館で開催しました。また本紙記事の通り 5 月 5 日には千葉県匝瑳市の妙福寺境内の「中帰連碑」の前で恒例の「観藤会」も開催しました。

報告事項の後の承認事項に移り、最初に司書の宮本直子から会計報告（別紙）があり、記念館の監査二人から監査報告があり、全会一致で承認されました。次に都内在住の飯田弓子さんを新たに理事に迎えることが承認されました。

検討事項に移り館内展示について、記念館が担当で 10 月に開催する「平和のための博物館・市民全国ネットワーク」全国交流集会までに、今井理事の協力を得ての館内展示に付いて検討しました。また、その「全国交流会」の計画案を検討し「全国ネット」の運営委員会に提案することを了承されました。

その他の項目では 8 月に熊本で開かれる「戦争遺跡保存ネット」全国交流会にに参加発表します。『会報』はぼぼ定期的に発行することが出来ました。

また昨年度は神奈川県内の女性と「受け継ぐ会・湘南支部」から大口カンパが届き有難う御座いました。

この 13 年間、ご理解ご支援下さる皆様の会費とカンパのみに支えられ運営できてことに心より感謝申し上げます。そして、この不便で狭い土地とオンボロの中古倉庫を買って下さった中帰連の皆様に感謝です。その協力がなければ運営は出来ませんでした。心より御礼と感謝申し上げます。今後とも宜しくお願い致します。

目　　次

・「総会報告」 …… 1
・鷲山、林先生来館 …… 2
・19 回「中帰連に学ぶ会」開催 …… 2
・20 回「中帰連に学ぶ会」開催 …… 3
・石川求先生「和辻哲郎文化賞」受賞 …… 3
・今年も 5 月 5 日に「観藤会」 …… 3
・第 1 回「むのたけじ賞」選定 …… 4
・連載「記念館資料室から」 …… 4
・茨城「常総生協」の皆さんが来館 …… 6
・「再生の大地」合唱披露 …… 6
・記念館「外壁修理」 …… 6

鷲山、林　両先生来館

元東京学芸大学学長の鷲山恭彦先生が、元同校教授の林敏潔先生（南京師範大学）と同僚の姜躾宅先生と院生の葉琳さんが 3 月 9 日に来館されました。皆さん中帰連に大変関心をお持ちの皆さんです。

静岡県掛川市出身の鷲山先生は留学中の周恩来や魯迅に日本語を教えた「松本亀次郎記念 日中友好国際交流の会」の会長をされています。

今年 3 月中国天津市から掛川市に、亀次郎の教え子である周恩来の蝋人形が寄贈され、鷲山先生はその中心的役割を果たされました。

松本亀次郎（1866 ～ 1945 年）は東京で中国人留学生が学ぶ「東亜高等予備学校」を設立し、約 40　年に渡って中国人留学生約 2 万人に日本語を教えたとされています。中帰連が収容された戦犯管理所も周恩来直轄の管理でしたが、その人道的扱いは日本留学と無関係ではないでしょう。

（前列右から鷲山先生、林先生、松村理事長）

19回「中帰連に学ぶ会」開催

「中帰連に学ぶ会」が 2 月 24 日（日）に開かれ、今回の講師は「方正友好交流の会」の大類善啓理事長にお願いしました。「方正」とは 731 部隊の在った哈爾浜郊外の東方 180 キロに在ります。

8 月 9 日のソ連参戦で国境付近に貼り付けられた開拓団は「哈爾浜まで行けば関東軍がいる」と信じて逃避行を続けました。しかし、関東軍は開拓団を棄民し我先に逃げ出していたことは知られた通りです。哈爾浜を目指した開拓団はこの方正まで辿り着きましたが、飢えと寒さや疫病などで約 3000 人がここで犠牲になり仮埋葬されました。

戦後、その仮埋葬の白骨の山が露出し、その状況を見かねた残留婦人の松田ちゑさんが地元政府に埋葬許可を願い出ました。その要望が中央政府の周恩来総理にまで届き、周総理は「それは中国政府がやらせてもらいます」との返事が届きました。その結果この方正に 1964 年秋に開拓団犠牲者のために中国政府が建立した「方正地区日本人公墓」が在ります。その現地と交流しているのが「方正友好交流の会」です。当時、中国政府は開拓団は元より一般兵士も含め「一部の軍国主義の犠牲者」と解釈していました。

その公墓の隣には残留孤児が建てた「中国養父母公墓」と、集団自決悲劇の「麻山地区日本人公墓」も並んでいます。

開拓団犠牲者の一番犠牲の多かったのは長野県南部ですが、その長野県阿智村に「満蒙開拓平和記念館」が在ります。機会がありましたら是非お出かけ下さ。

（「方正地区日本人公墓）

（前列左から 2 人目、大類善啓さん）

20回「中帰連に学ぶ会」

社会学の立場から、中帰連との関連で今の中国をどう見たら良いのか：21 世紀社会の現段階と中国（要約）

東京大学名誉教授　庄司興吉

社会学の歴史をふまえて現代社会の研究をしてきたが、中国が大きく視野の前面に出てきている。社会学の歴史を追いかけて 20 世紀後半までくると、アメリカ社会学やヨーロッパ現代思想の対極として、中国を初めとする旧従属・旧植民地諸国の独立と発展が圧倒的な現象として位置づけを迫ってくる。現代社会を国際社会から世界社会・地球社会に向かいつつあるものとしてとらえても、米欧日「先進」社会に対抗して急速に成長しつつある人民社会の先頭に立つ中国を位置づけなければ、その総体構造を把握できない。そういう観点から中国を見ると、革命後、新しい社会として再創造を図ってきた中国が、大躍進と文化大革命の混乱を克服して改革開放路線を取り始め、天安門事件をあのような形で乗り切って経済成長を続け、2010 年を境に世界第二位の GDP となり、都市人口が農村人口を上回ったのは、それにふさわしい説明を要する圧倒的現象なのではないか。1950 年代に人民連帯に基づく新しい社会の創造を考えていた中国の象徴的な行為が、中帰連につながった日本人戦犯の待遇と処理にあったとすれば、新社会の理念と現実との緊張関係がその後どうなってきているのかを、米欧日で評価基準とされてきた市民社会の枠を越えてとらえようとしてみなければならないのではないか

（前列左から 3 人目・庄司興吉先生）

石川求先生「和辻哲郎文化賞」受賞

「記念館」の会員で哲学者の石川求先生（首都大学東京大学院人文科学研究科教授）が、姫路市主催の第 31 回「和辻哲郎文化賞」（学術部門）を受賞されました。

石川先生は中帰連・神奈川支部の絵鳩毅さんが哲学・カントを学んでいることを知り、生前の絵鳩さんと交流されています。石川先生は受賞式の「スピーチ」の大部分をその絵鳩さんと中帰連のことについて話されました。

絵鳩さんは旧東京帝国大学で哲学を学び文部省に入省しました。しかし、「図書検閲」の仕事を指示され「尊敬する恩師の検閲など出来ない」と文部省を辞し、地方の女学校の教師になりました。

当時としてはそのくらい異例のリベラリストの絵鳩さんも、戦場では行軍の先に中国人を歩かせる「人間地雷探知機」に使ったり、中国人を杭に縛り付け、剣で突き刺し殺す「実的刺突」を部下に命じたことを証言していました。

（石川求 先生）

今年も5月5日に『観藤会』開催

中帰連千葉支部が匝瑳市の妙福寺に『中帰連碑』（謝罪碑）を建立しています。

この「碑文」が判ると何処からも設置を断られ設置場所が決まりませんでした。当時この妙福寺の檀家総代をしていた篠塚良雄さん（元 731 少年隊員）がお寺に相談したところ、受け入れられ建立されました。

私たちはお寺の藤の咲く頃の 5 月 5 日に、毎年この碑の前に集い「観藤会」と称して中帰連の皆さんを偲び、彼らの体験と思いを後世に伝えることを再確認する場としています。

今年も篠塚さんの娘さんも参加下さり 16

人が集いました。篠塚さんのお墓にもお参りし、庫裏で「証言―侵略戦争」（43 分）を上映し、その後、懇親会を開き交流を深めました。千葉大学に留学中の王さんは「こんな日本人がいて嬉しい」と感想を述べていました。

（「中帰連碑」の前で参加者の皆さん）

第１回「むのたけじ賞」選定

敗戦の 1945 年 8 月 15 日「ケジメをつけたい」と朝日新聞を退社し、故郷の横手に戻り週刊新聞『たいまつ』の火を掲げ、平和や民主主義を訴えた続けたむのたけじさんを記念し、埼玉の市民運動家・武内暁さんらの発案で昨年「むのたけじ賞」が創設されました。

この賞はむのさんが「朝日新聞」を辞めた後、故郷の横手から発信を続けたことを受け、地域に光を当てることが目的で共同代表は「落合恵子、鎌田慧、轡田隆史、佐高信、鈴木邦夫、永田浩三、武野大策」の各氏で、62 点の自薦、他薦があり下記の 3 点が受賞しました。尚、むのたけじさんには記念館の「名誉顧問」をお引き受け下さっていました。

2018年(平成30年)4月12日(木曜日)

民衆目線 ジャーナリストに光

「むのたけじ賞」創設へ

県内の関係者ら準備

地域の人材 登竜門に

2016年に101歳で亡くなったジャーナリストむのたけじさんの精神を受け継ごうと、県内で顕彰のあった市民らが「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」の創設を準備している。むのさんが地元の秋田県で週刊新聞「たいまつ」を発行していたことを踏まえ、幅の広い分野に取り組む個人や団体を表彰する。（井上隆雄）

2015年7月、本紙のインタビューで話すむのたけじさん＝さいたま市内で

「むのさんの放つ言葉は、ずっと私たちを励ます。」と話す武内さん。「たいまつ」は、一時期、一般の地域やミニコミ誌で発刊し、教育や農民運動を中心に対象にする全国、時期に時代に合った、七八年に休刊した後も、講演などを続けた。

戦時中、陸軍の軍部に対する「無意味な戦争を続けてはいけない」と考えたむのさんは、戦意高揚を図るラジオ放送の原稿を拒否し、敗戦後、朝日新聞社を退社。一九四八年に「たいまつ」を創刊し、教育や農民運動を中心に対象にする全国、時期に時代に合った、七八年に休刊した後も、講演などを続けた。

戦争はさいたま市内で過ごし、市民だけのジャーナリスト（鎌田慧）を目指そうと、市民運動家の武内暁さんらが呼び掛けた。六月に発行の会は「むのさんは、ただの新聞人ではなく民衆の目線で、地域の人材を発掘する登竜門」と説明している。

武内さんは、埼玉・市民ジャーナリズム賞（仮称）で、賞の趣旨発表を大橋さんが講演を行う。午後、同会の不戦・会費は自由。問い合わせ＝武内さん＝電090（2[illegible]）[illegible]

大賞：「言わねばならないこと―新聞人桐生悠々」）北陸朝日放送・黒崎政己）

優秀賞：「飯館を掘る―天明の飢饉と福島原発」（現代書館、港北新報・佐藤昌明）

特別賞：「地上イージス配備問題に関する一連報道」（秋田魁新報）

連載　記念館資料室から

第18回　地方支部の息吹と期待

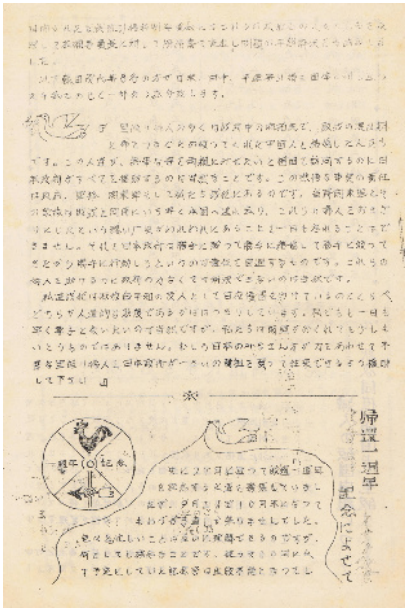
石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

『前へ前へ』第 8 号は、1957 年 11 月 10 日の発行です。前号に引き続いて、第 1 回全国大会の報告が前半部分を占めています。そのうち**「支部典型報告」**では、４つの支部の様子が掲載されています。地方支部の苦労や工夫が注目されます。

「活動上での困難について（北海道　大河原孝一）」では、**「公安調査官が職場にやってきて上役と話し中傷を行ったりして、(略)『中共帰り』というだけで疑いをむけ人権を無視する政府の不法を何とかうち破らねば」**と、就職難の深刻さを訴えています。他方、就職問題が早く解決できたケースとして**「就職状況とその後（埼玉県　山中盛之助）」**では、県との団体交渉は不調だったものの、**「交渉の都度、各新聞社等報道機関のインタビューを受け広く県民に訴え」**たことが一定の効果を生んだと報告しています。新潟も県議会との交渉に実りは小さかったようです（**「県会との交渉　西陵友の会との関係（新潟県　苅部一郎）」**）。

最後に、島根支部の報告が 9 ページにわたって全文掲載されています（**「相互の連係と団結統一について（島根県　三浦春夫）」**）。

編集者のコメントとして、**「島根県支部は多くの支部の中でも最もよい活動状態が見られますので（略）各支部の参考に供する」**ためとあります。後に山陰支部となる同県の活動は、90 年代にも結集率の高さで模範的支部として表彰されるなど、独自の存在感を持ち続けました。草創期のこの段階でも、**「支部員が一人残らず結集した組織」**を目標に、支え合うことを重視していることが伝わってきます。まず、組織体制としては、当初、支部の下位に「地区」を設けましたが、**「地域的独自活動の面ではほとんど見るべきものがなかった」**ため、さらに下位に**「血の通い実のある相互援助、相互琢磨をはかるために」**、２～３人の「グループ」を設けたところ、機能し始めたといいます。**「自己の家庭問題、一身上の事、活動のこと等、全生活について家族や親族よりもあてになる唯一の相談相手となり知恵袋となっている点からみても、その必要性をますます感じております」**。また、後に 100 号以上発行され続けることになる「支部報」も、当初は連絡事項が中心の内容になっていた点を改め、**「紙上を『各人の会合の場とする』」**よう心掛け、**「同僚の活動を紹介し、各人に自己点検と新たな活力を与える」**ことを目指したとしています。さらに、支部で諸会合を行う際には、参加者各人には**「時間が惜しく、話したいこと、聞きたいこと、解決してもらいたいことがたくさんあ」**るため、**「会費を少なくして話を多くする」**ことを心掛けるようにしたと報告しています。そうした努力の結果、支部の会費納入者は**「49名中30～33名で、60～67%」**と本部より高い割合を占めています。それでも、会費を納められない会員にこそ**「事情を説明して顧慮をなくすよう努力すべきであったのを怠ってきました」**との反省が表明されています。そして、**「私たちの仲間こそが何より信頼すべき精神的結合体であることが認識されつつある」**ものの、**「最も普遍的な悩みである当面の経済問題即ち、資金がない、副業がほしい、アルバイトはないか等々」**は支部レベルでは解決できない問題のため、**「本部提案にある経済協力の新方針が具体化されることを強く希望します」**と結んでいます。



実際に、**「本部報告」**のなかでも、「中連金庫」「中連販売部」という相互援助の具体化に期待が寄せられている支部として、熊本、宮城のほか、岩手、静岡、山口、鹿児島、佐賀など地方支部の名が上がっています。九州の各支部は、後に対政府補償要求運動でも積極的となることを考えると、高度成長期の中央－地方の格差が既に生まれつつあることが垣間見えます。ただ、経済成長の波には取り残されても、その気概はまったく別で、訪日が予定されている中国紅十字会の李徳全代表の歓迎カンパでは、山口、福岡、熊本、四国、兵庫などの地方支部の積極性が目を引きます。

最後に、今号の注目記事として、寄稿文**「帰還一周年記念によせて」**があります。記念文集を出す予定だったのが**「わずか3通しか集まりませんでした」**というところに、帰国１年段階の会員の切迫した状況が表れているといえるでしょう。紹介する紙数がありませんが、**「憎しむものはただ戦争：苦難を越えて更に平和と日中友好のために…（溝呂木清）」「妻を語る（盛合忠平）」「生活の中から（関山順作）」**の全文が掲載されています。**「日本の社会の実情をまだまだ甘く見ていた」**ものの**「どんな困難でも必ず克服できるという自信を持つことができた。それは仲間がいるからである。この１年間たえず目に見えない大勢の仲間の力が私を支えてくれた」**という溝呂木の感慨が、３人だけでなく、会員たちにもおそらく共通する真摯な思いを伝えています。

茨城「常総生協」の皆さんが来館

4 月 20 日茨城県の「常総生協」の皆さん 6 人が、遠くから来館下さいました。皆さん大変熱心な方で、芹沢事務局長の説明の後に 30 年前の「中帰連」のＮＨＫの映像を観て戴きました。記念館見学の後、高速で 30 分ほどの「原爆の図・丸木美術館」へもご案内しました。

「再生の大地」合唱披露

「撫順戦犯管理所・中帰連」の体験を歌いあげた『再生の大地　撫順の朝顔』（作詞：大門高子、作曲：安藤由布樹）という約 1 時間の合唱組曲があります。この歌を歌っている「再生の大地合唱団」（団長：姫田光義）が、福祉関係の経済視察で来日中の撫順市の来鶴・党書記の皆さん 4 人に文京区の「箪笥会館」で 4 月 22 日「再生の大地」の合唱を披露しました。その後、懇親会で交流を図りました。同合唱団は国内は元より中国でも公演をしています。　　（「箪笥会館」で）

記念館「外 壁 補 修」

記念館は中古の農業倉庫と土地を主に中帰連の皆さんが「カンパ」で買って下さいました。しかし外壁の塗装や破損がひどく、『会報』24 号でお知らせの通り相模原の女性から大口カンパや、その後「受け継ぐ会・湘南支部」からも大口カンパが寄せられ、建屋の補修費用 96 万円をほぼ賄うことができ有難う御座いました。皆様の会費とカンパのお陰で心から御礼と感謝申し上げます。

『NPO 中帰連平和記念館』

〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）